

氏名	劉 亞 颯
学位の種類	博 士（文 学）
学位記番号	第3905号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
学位論文名	現代日本語のコミュニケーションにおける対人表現に関する研究
論文審査委員	主 査 教 授 毛利 正守 副主査 教 授 村田 正博 副主査 教 授 芝原 宏治

論文内容の要旨

本論文は、語用論の立場から現代日本語のコミュニケーションにおける様々な表現に関して考察したものである。

本論文での考察は、第Ⅰ部のコミュニケーションにおけるポライトネス理論の応用と、第Ⅱ部の対人表現におけるポライトネスの様相との二部からなっている。

人は、コミュニケーションを円滑に行うために、話し相手のフェイスを脅かさないように、様々なストラテジーを使用するが、第Ⅰ部では、依頼と謝罪の場面におけるポライトネス表現とフェイスの関係を中心に考察を行っている。

第一章は、ポライトネスに関する先行研究の中で、本論文と内容的にもっとも関連があるGriceの「協調の理論」、Leechの「丁寧さの原理」、またBrownとLevinsonの「ポライトネス理論」を説明し検討を加えている。

第二章では、依頼する場合のポライトネス表現について考察し、まず依頼に用いられる日本語の敬語とポライトネスの相違について論じている。日本語における敬語は、普通尊敬語、謙譲語、そして丁寧語の三つに分類されるが、日本語の敬語表現は、話し手が聞き手の社会的地位や自分との関係などによって、ことばを選択することで相手に対する敬意を表すものである。一方、ポライトネスは聞き手の社会的地位には大きく関わらないものであり、この点で、敬語表現はポライトネス表現とは同じものでないことを説いている。

日本人は、一般にネガティブ・フェイスのストラテジーの使用を好み、ポジティブ・フェイスの使用は少ないと言われている。その理由は、日本人が依頼という行為に対して、負担を大きく感じるからであり、依頼を行うときに、できるだけ相手に負担を小さく感じさせる間接的な表現を使用するからだと言われている。ところが、実際に、依頼の場面を見ると、日本語のポジティブ・フェイスの使用はそれ程少なくはなく、特に、勧め、誘いまたは激励という場面では、ポジティブ・フェイスのストラテジーが使用される場合が殆どである。こうした現象から、ポジティブ・フェイスのストラテジーとネガティブ・フェイスのストラテジーとの共存が可能であることを明らかにし、BrownやLevinsonの理論によって説明しきれないところのあることを検証している。

第三章では、謝罪の表現を取り上げている。謝罪行為の遂行は一定の社会のフェイスへの認識と密接に関わっているものであるが、本章では、そのことを知るために日本人と中国人を対象にして、過ちを犯した人に対する反応および対応について調査を行っている。その結果、たとえば、日本では目上の人がポライトでない表現を用いても許容されることがあり、これに対して、中国では目上の人々のフェイスが優先的に考えられる傾向は日本よりも弱いこと、また、謝罪のときに使用されるストラテジーの比較などを通し

て、日本人と中国人のフェイスへの認識に違いのあることなどを分析している。

更に、日本語における謝罪表現が使用される範囲の広さについても考察し、日本語ではたとえば、「すみません」という謝罪の表現は、呼びかけるときのポライトな言い方として用いられることがあり、感謝の場合にもしばしば用いられることのある点を捉えて、「ありがとう」と「すみません」の間で、「謝罪」表現と「感謝」表現との代替現象が行われているとし、受け手と行為者との社会的距離が大きく関わっていることを見届けて、「すみません」自体がポライトな言い方になっていることを読み取っている。

第Ⅱ部では、円滑なコミュニケーションが行われるためにももとはポライトネスの意味を持たない表現を使用して、結果的にポライトネスを実現することがある点について、副詞「ちょっと」や不確定表現「だろう」を取り上げ検討を行い、これらの表現がポライトネスを果たしていることを明らかにしている。

第四章では、程度副詞「ちょっと」の意味用法を中心に、「少し」との相違を含めて吟味している。「ちょっと」は、基本的に、数量の少ないことや程度の小さいことを表す副詞であるが、しかしそうした「時間の短さ」や「話の量の少なさ」という意味を表さず、相手の負担を軽減するために「ちょっと」が使用される場合のあることに注目して、この「ちょっと」が本来の少数量、小程度の意味を失い、ポライトな言い方として捉えられること、またマイナスの程度を控えめに表すことによって、聞き手に対する同情を示す場合のあることを証して、これを本論文では「同情の原則」と呼び、日本語におけるポライトネスの表現のストラテジーとしての位置づけを行うと共に、更に「ちょっと」の派生的な用法にも論及している。

第五章では、助動詞「だろう」を取り上げ、その意味と用法について検討している。「だろう」は、一般に推量の助動詞と呼ばれるが、本論では、「だろう」の用法を「推量」「確認」および「婉曲」の三つの用法に分けて論じている。「推量」とは別に、「確認」について、聞き手が情報を持っているとの前提で、話し手が既知であることを確認するという意味で、その確認を「事実確認」と称し、一方、未知であることの確認を「推量確認」として捉えている点、新しさがある。また、とくに、従来あまり着目されてこなかった文章中の、段落末での「～と言っていいだろう」「～と考えていいだろう」などの表現について、書き手が断言的なことばを避け、自身の主張や意見を婉曲的に読者に伝えるかたちをとって、読み手に押しつけているという負担感を小さいものにするという気配りがなされており、この意味で、ポライトだと認識されていると見て問題がないと把握するなど、次の第六章での「らしい」と「ようだ」の用法の検討、及び第七章での様態の助動詞「そうだ」の意味用法や「ようだ」との相違についての考察をも含めて、見過ごすことのできない、興味深い指摘が少なくない。即ち、様態の助動詞「そうだ」の意味用法及び「ようだ」との相違について、話し手が感覚で捉えた事態の様相を述べるときに「そうだ」を使用し、これは「ようだ」の意味と近似するが、両者はしかし区別されていること、動作動詞が前接する場合、「そうだ」は事象が発生する直前の様相を表し、その発生の可能性が高いことを示すのに対して、「ようだ」は話し手が現実世界の各種の状況によって、ある事象の発生を推量することを表していること、状態動詞または形容詞が前接する場合には、「そうだ」は未確認のことを表し、「ようだ」は確認済みのことを表すと把握することなどである。こうした捉え方は、具体例に則して堅実に論述されている。

以上、本論文は、現代日本語のコミュニケーションにおける様々な場面で用いられる対人表現を取り上げ、その表現の意味用法およびポライトネスとの関係について論証したものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、語用論の立場から現代日本語のコミュニケーションにおける様々な場面に用いられる対人表現を取り上げ、その表現の意味用法及びポライトネスの特質について究明しようとした新研究である。本論は二部からなっており、第Ⅰ部では依頼と謝罪の場面に関わるポライトネス表現とフェイスの関係を、

第Ⅱ部では円滑なコミュニケーションが行われるために、本来はポライトネスの意味を持たない表現を利用することによって結果的にポライトネスが実現される実態を綿密且つ精力的に論じて、現時点における現代日本語の対人表現研究の高い水準に達した内容となっている。

こうした成果を先ず確認した上で、以下、各論の審査結果を述べる。

第一章は、研究史の立場から、グライス論における格率と、それと関わるリーチの「丁寧さの原理」を検証し、ブラウン及びレビンソンによる「ポライトネス理論」を踏まえつつ、ポライトネスの言語行動とストラテジーの位置づけを行った上で、日本語の敬語とポライトネスとの関わり、とりわけその相違点について論及し、筆者自身の立場を明示すると共に、そこに横たわる問題点を浮きぼりにした。

第二章は、日本語を通して、相手に対する配慮のもっとも現れやすい「依頼の場面」でのポライトネス表現について検討を加え、依頼に用いられる表現が肯定疑問文よりも否定疑問文の方がより丁寧であることを丹念に読み解き、この丁寧さは所謂「敬語」という枠組みだけでは捉えることができず、ポライトネスの高低と関連することを導き出すことに成功している。また、一般に、西欧語と異なって日本語及び中国語の中でポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスのストラテジーが対立する関係にあるのではなく、共存し得ることについて豊富な用例に基づきながら理論付けたことは注目され、ブラウン及びレビンソンの理論の見直しへと迫ることになった。

ただし、日本語の敬語表現における尊敬語と謙譲語とが原理的に相手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスとのいずれのフェイスを重視して発達したかについてはさらなる検証が期待されるところである。

第三章は、相手に与える負担ゆえに許しを求める「謝罪の場合」でのポライトネス表現におけるフェイスを中心に検討がなされ、謝罪行為が一定の社会的フェイスへの認識と関わる点に立脚して、日本人と中国人とを対象に過ちを犯した人に対する反応及び対応についての調査を広く行い、過ちを犯した者が目上の人である場合等の対応のし方を分析することを通して、日本人と中国人のフェイスの認識の違いを的確に炙り出している。謝罪表現の適用範囲の分析においても、謝罪表現が感謝表現に代替される場合に受け手と行為者との社会的距離が関与していることを明らかにするなど、注目される新発見が提示されている。

第四章は、副詞「ちょっと」について、「ちょっとした」との関係や「少し」との相違をも含めて検討を進め、程度副詞としての基本的な意味用法を押さえた上で、本来の少量、小程度の意味を失い、ポライトな言い方として捉えられる「ちょっと」の意味変化の過程と、聞き手に対する同情を示す多様な用法について論述し、「共感の原則」とは別に、あらたに「同情の原則」を打ち立てていて説得的である。第二章から第四章の成果は、本論文の中でもとりわけ圧巻と言える。

第五章は、一般に推量の助動詞と呼ばれる「だろう」について、詳細な分析を行って、これを「推量」「確認」及び「婉曲」の三つの用法を有するものとして把握し、「確認」についても話し手の既知と未知との情報の違いから「事実確認」と「推量確認」という新たな観点を導入して論じた点、従来あまり注意が向けられなかった段落末での「～と言っていいだろう」「～と考えてもいいだろう」の表現にも着目してポライトネスの観点から意味づけを行った点などが高く評価される。

第六章は、「らしい」と「ようだ」の用法の検討を通して、話し手の事実を推論する「らしい」の使用と事態の現状の描写に重点をおいて推論する「ようだ」の使用とを論じてその相違を具体的に明らかにしており、方法論的にも注意され、「ようだ」に伝聞の用法がなく「らしい」に推量・伝聞の用法があることも指摘して注意されるが、ただ、その結論に間違いがないとしても、部分的には説明不足のところもあって惜しまれる。

第七章は、同じ様態の助動詞といわれる「そうだ」と「ようだ」を比較検討し、前接する語が動作動詞の場合と状態動詞または形容詞の場合とにわけて両語の在りようを眺め、事象発生の高さや未確認か確認

済みかを基準に両語の用法の違いを論じて妥当な結論へと導いている。

本論文は、常日ごろ使用している日本人にはかえって思いつかない着想と筆者自身の鋭敏な言語感覚が備わっており、あるいは中国での英語の教師としての実績もあって、言語の分析は行き届いたものとなっている。しかも、平成12年12月に国語審議会が、従来、敬語という範疇の中に尊敬語・謙讓語そして丁寧語という三つの分類をほどこしてきたものを、あらたに「敬意表現」として捉え直す必要性をうち出したが、日本におけるかかる研究がようやく緒につきはじめたこの時期に、本論は、部分的に世に問うてまとめるというかたちを敢えてとらず、大きく西欧の言語と比較しつつその体系化をはかるべくまとめられたものであって、本論は、その意味からも評価される。

仮説に対する論証方法や部分的に更なる掘り下げが必要であること、また第Ⅰ部と第Ⅱ部との論述の中で、両者が本論以上に更に有機的に論じられることが望まれることなど、今後の精進によって論の進展が期待されるところがあるけれども、総じて現代日本語における研究分野に新しい切り口を提示し、事象を生き生きと叙述して体系化へと向かった本論の成果は、そうした短所を補うに余りあるものがあると言える。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。